

ミュトスの衣装をまとった近代悲劇

—— 他者の欲望としてのヘッベル『ギューゲスの指輪』 ——

斎藤 成夫

フリードリヒ・ヘッベルの戯曲『ギューゲスとその指輪』(1856)は、写実期／三月後のドイツ演劇としては例外的に、現在でも頻繁に個別研究の対象としてとりあげられ、上演回数も多い。実際表現の多様性、息苦しくなるほどの緊密な構成とその劇的展開¹⁾、そしてなによりも素材の秀逸さには群をぬいたものがある。

その物語はまたもや神話^{ミythos}に取材したものであり、古代リュディア王ギューゲスの即位伝説に関して、ヘッベルが独自につくり直したもので、かいつまんで述べると、以下ようになる。

リュディアの客人でギリシャの青年ギューゲスは、かつて手に入れた、はめると人に姿が見えないという指輪をカンダウレス王に献上する。東方出身の絶世の美女である王妃ロドーベは、祖国の風習により夫以外の男性に姿を見せないという。王はこの指輪をギューゲスにはめさせて、みずからの寝室に招き入れ、彼女を見せる計略を立てる。王妃を目のあたりにしたギューゲスは、そのあまりの美しさに震撼し、旅立つことを決意する。しかしすべてを知ったロドーベは、カンダウレスを殺害して自分と結婚するか、彼女みずから命を絶つかという選択をギューゲスに迫る。みずからのあやまちを悟ったカンダウレスにギューゲスは決闘を申しこみ、カンダウレスは斃れる。ギューゲスを王に推戴する民衆が歓呼するなか、2人は婚礼を挙げるが、ロドーベはみずから命を絶つ。

1) クレッチマンはこの作品をギリシャ精神に則った精巧な人間構造をもつ悲劇として、目覚ましい人物分析をおこなっている。Vgl. Carsten Kretschmann, *Geist und Gestalt. Überlegungen zur Konfiguration von Hebbels „Gyges und sein Ring“*, in: *Hebbel. Mensch und Dichter im Werk* (Schriftenreihe der Friedrich Hebbel-Gesellschaft Wien), Folge 7, Berlin 2000, S. 135-162

当然これは神話創作的作品となる。すなわち象徴的フェティッシュと人物の象徴的行為。それによってこの作品は、人間の原初的感情にうったえかけることになるだろう。

さて、素材には二つの典拠があることが知られている²⁾。一つはヘロドトスの『歴史』に出てくる逸話³⁾、いま一つはプラトンの『国家』^{ポリテイア}に出てくるそれであり⁴⁾、多少アナクロニズム的に、プラトンの方が原形をとどめているという⁵⁾。プラトンではギューゲスは羊飼いであり、地震によって生じた割れ目から出てきた巨人の遺骸が指輪をはめているのを見つけ、王妃と結託して指輪の力で王を殺す。ここでギューゲスは邪悪な篡奪者である。これは非常に短い、まさに逸話といえるものであり、ヘッベルが着想を得る直接のきっかけになったのは、ヘロドトスの方であろう。ここには指輪は出てこないが、それ以外はヘッベルに近い。ここでギューゲスはカンダウレス王の側近であり、王は彼に寝室で密かに王妃の裸を見せ、自慢する。見やぶった王妃はギューゲスを呼びだし、王を殺してみずからと結婚して王となるか、あるいは自殺するよう迫る。ここでのテーマは王妃の復讐である。いずれにせよ、尋常ではなかったと思われる略奪婚をとまなう王権交代の軋轢を、寓話的に物語ったものである。

そこでヘッベルである。これは客観的に言えば、民衆を扇動したうえでの王位篡奪劇であるが、王妃の素性と祖国の風習に関して、プラトン、ヘロドトスではともに関係がないほか、ヘッベルは作中に入念なニュアンスを織りこんでいる⁶⁾。

さし出した父祖伝来の冠を拒むカンダウレスに、忠臣トーアスは諭す。

ここに集い来たる幾千の者どもは、たとえ身なりがよく、いい物を食しておろうとも、私同様まったく愚直な者どもです。どうかこのしもべをばお信じください

2) Vgl. dazu Saeko Ishikawa-Beyerstedt, „Gyges und sein Ring“, in: dies., *Friedrich Hebbels Einfluss auf die Moderne. Seine Rezeption in dramatischen Bearbeitungen von „Judith“ bis „Die Nibelungen“*, Marburg 2014, S. 381-435.

3) ヘロドトス『歴史』第1巻8-12参照。

4) プラトン『国家』第2巻3(359B-360D)参照。

5) Vgl. Karl Reinhardt, „Gyges und sein Ring“, in: ders., *Vermächtnis der Antike*, Göttingen 1960, S. 175-183.

6) たとえばラインハルトはこの作品の素材に由来する古典的悲劇形式と、作品のもつ近代的心理分析的要素が軋轢を起こしているとする。Vgl. Hartmut Reinhardt, *Die Kröte vor dem Gemach. Zur Verteidigung der tragischen Struktur in Hebbels „Gyges und sein Ring“*, in: Hebbel-Jahrbuch (1983), S. 89-126.

ませ、この者どもにとって、あなた様のこうべとこの冠は同じ物の半分なのであって、あなた様の腕とこの剣も同様なのです。⁷⁾

民衆は習慣的であって、保守的である。それが階級社会とその秩序を支える根本的要因である。彼らは人格ではなくて、慣習と従属心によって権力者を支持している。すなわちトーアスは新しい試みの及ぼす影響とその危険を警告しているのだ。これに対してカンダウレスは新しい冠を望んで、ギューゲスに言う。

ここでは王はその冠によって、そして冠はその鏽によってのみ認められている。それを磨きあげる者に災いあれ、輝けば輝くほど、重みは失せていくのだ。しかし、人々が伝来の装身具で飾りたてることをありがたがるのに耐えられなくなって、そんなことを忘れるに至ったら、それがなんの役に立とう。(Ebd.)

カンダウレスは開明的な王である。因習や権威への民衆の盲従に頼らない、実力と人格に対する人々の信認によって国を統治しようとする、いわば啓蒙専制君主である。一方でカンダウレスはギリシャ人が知性・巧妙さにおいて優れているものの、リュディア人よりも胆力・気力において劣っていると主張し、ギューゲスが当地の武闘競技会に参加しようとするのを止める。つまり実力と人格においてリュディア人の方が上であることを主張する。

君たちギリシャ人は巧妙な国民で、よその者に紡がせておいて、自分たちはそれを編む。すると1つの網ができあがるが、そのうちの1本も君たちの糸ではないのに、網は君たちの物なのだ！ (I 100 ff.)

そしてもし試合に参加したら、「君は生きては帰れないだろう」(I 126)と言う。この作品が成立したのは1856年のことである。周知のとおり三月革命は1848年のことであり、時代は市民革命と植民地主義である。このカンダウレスのギリシャ観には近代的植民地主義が反映している。先のトーアスのせりふは市民の蜂起(革命)を暗示

7) Friedrich Hebbel, *Gyges und sein Ring*, in: ders., *Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe*, besorgt von Richard Maria Werner, 1. Abteilung, Bd. 3, Berlin 1904, S. 243. 以下同書からの引用は本文中に幕と行数のみ記す。

したものである。この作品はギリシャの衣装を装いながらも、思考の土台となっているのは近代のディスクールである。

さて、一方カンダウレスは王妃ロドーベをその試合に臨席させようとするが、それに対して彼女は言う。「あなたの前には父の眼ざししか私にとまったことはなく、あなたの後にはもう誰も私をみとめたことはない」(I 437 f.)。そして「乳母に、男に見られたら死なねばならない、と歌って聞かされた」のだという (I 454 f.)。「そなたの父上はインドとギリシャの風が交わるところの玉座にある」(III 989 f.)とカンダウレスが言うように、おそらくバクトリアないしはガンダーラ辺りの出身と思われるロドーベは、この祖国の掟を忠実に守ろうとする。ここに東西文化の衝突が生じる。ギリシャ人ギューゲスと東方出身のロドーベ、そしてその間にあるリュディアの王カンダウレス。やはりこの作品が書かれた植民地主義時代の背景を無視して、この作品を解釈することはできないであろう。このロドーベの祖国の掟というのはミュトスにはない設定であり、ヘッベルが加えた近代的視座である。そしてそれがすなわちこの作品を支配するモチーフとなる。カンダウレスの苦悩もここに生じる。彼は「最も美しい妻にキスをしていると、思いちがいをして自慢している自惚れた愚か者などではない」ということの証人を必要とする」(I 531 ff.)。ロドーベは美しい。しかし彼女は夫以外に姿を見せない。それはつまり彼女の美しさは意味をもたないことを意味する。それに意味をもたせるためには「証人を必要とする」。つまり彼はギューゲスの「口から、あなたは幸福ですと言われて、初めてそうなるのだ」(I 538 f.)。

資本主義社会において幸福は他者の承認によって決定される。それは他者の欲望を刺激するかどうかにかかっている。その際当事者の感情は客観的判断には関係しない。幸福か否かは他者の欲望が決定する。すなわちカンダウレスのロドーベに対する欲望は、ギューゲスのロドーベに対する欲望なのだ。ここに倒錯的状况が生じる。カンダウレスはみずからの愛を完全なものにするために、みずからの妻へのギューゲスの欲望を必要とする。「おまえの嘆息が夜に語ったこと」(II 599 f.)は「余の勝利なのだ」(II 601)。つまりギューゲスのロドーベに対する欲望とは、カンダウレスのロドーベに対する欲望でもあるのだ⁸⁾。

一方このことにロドーベも気がついている。「あなたを私に惹きつけている感情というのは、愛というよりも、所有しているという誇りであって、あなたの情愛は他人のねたみがなければ消えてしまうのではないかと、日ごろ案じておりました」(III 1074 ff.)

8) こうした三者の錯綜した関係については、vgl. Helmut Kreuzer, *Hebbels „Gyges und sein Ring“ (im Rahmen der Stoffgeschichte)*, in: *Hebbel in neuer Sicht*, hrsg. von H. K., Stuttgart 1963, S. 294-314.

／傍点論者)。ロドーペの懸念はおそらく正しい。近代人カンダウレスのロドーペに対する感情は、資本主義的な所有への欲望であって、これは他者の欲望を媒介してのみ充足される。そしてカンダウレスの欲望の充足、つまり彼の「勝利」は愛の破局を意味する。

愛だけではない。カンダウレスがみずからの権威に実効性をもたせように行った啓蒙政策も、倒錯的状况を生み出す。

トーアス なんということを俺は今晚聞かされねばならなかったのだ！（……）
謀反！ それにつづく敵の来襲、そして新たな王の選出！ 本当だろうか！ 感づいてはいたが、ここまでにたち至っていたとは知らなかった！（II 555 ff.）

実効性（＝近代化）を求める王の政策の結果、民衆はカンダウレス自身にその必要性をみとめなくなる。実はカンダウレスはヘラクレスの末裔という王朝の権威によって支持されているのだ。啓蒙の結果は民衆の蜂起である。

トーアス 陛下には彼らをあまりにもひどく傷つけてしまったのです。それにあのギリシャ人にしたところで、ある朝起きて、夜のうちに彼らが足下に置いておいたあなたの王冠に躓いても、それでもまだそれを押し返すでしょうか？（V 1681 ff.）

民衆は保守的で権威主義的である。彼らが支配者に求めているのは、その権威である。この権威を巧妙に行使すれば、民衆たちはみずからすすんで支配に服することであろう。つまりカンダウレスの権力への意志は他者＝民衆の欲望に支えられている。しかし支配者たるカンダウレスがみずから権威主義を放棄し、実力主義をとるとき、民衆たちはもはや彼になんの価値もみとめなくなる。ここに民主主義の芽がある。

カンダウレス これは何だ、あるいはこれは何の役にたつのだとかいったことを、決して問うてはならないのだ。ボール、王冠、あるいは錆びついた剣の中には、いったい何が隠されているのだろう、それは永遠なのだろうか、皆が余と同じように考える時代が、いつかやってくるにちがいないことを、余は知っている。（V 1807 ff.）

その「時代」こそ民主主義の時代であり、それはカンダウレスの時代には実際にありえないが、ヘッベルの時代においては目前に迫っているというか、フランス革命以降、すでに始まっている。ヘッベルはこうした状況を象徴的に「世界の睡眠」というメタファーで表現する。カンダウレスがギューゲスに言うように、「世界の睡眠にだけは決して触れてはいけない」(V 1855)。この「世界の睡眠」から民衆を覚醒させること、すなわち民衆を啓蒙すること、つまり階級の理不尽さ、無意味さを認識させることは、当然権力者にとって自殺行為となる⁹⁾。このことに関して、たとえば旧ソヴィエト連邦崩壊時に、「改革」をうちだした指導者自身の必要性を、民衆がみとめなくなったことを、我々現代人はその実例で知っている。これはもちろんヨーゼフ主義後の三月革命を背景とした設定であることに疑いはない。さらにヘッベル（あるいはトーマス）によれば、「陛下は穏やかすぎて、誰も恐れる者がいなくなり、こうして敵がやって来た」(V 1931 f.)。実力に欠ける実力主義者が開明を行うと、隣国も攻めてくるといふ。これは統治能力の喪失を比喩化したものである。権力者が改革を行うのは、論理矛盾である。改革とは権力の再検討を迫るものだから。権力は強化、あるいはせいぜいのところ維持することしかできない。近代の弁証法はその歩みを進めるほかないのだ。

しかし話は錯綜している。このカンダウレスの開明主義のテーマにロドーベの誇りへの侮辱のテーマが重層化して、彼は破滅する。そしてこの2つのテーマは根において一体である。ロドーベの誇りの淵源とは何か？ それは祖国の因習、それに対する侮辱とは伝統的権威に対する不敬である。カンダウレスの（軽率な）開明主義はここにおいても呪われた結果をもたらす。彼の王朝は啓蒙された民衆からは見放され、伝統的権威に裏打ちされた王権を失うことになるだろう。だからこそカンダウレスは「自分が重いあやまちを犯したことを十分感じている」のだ (V 1804)。

さて、そこで次は指輪のテーマである。指輪の象徴的意味に関しては様々な説が立てられているが、ここでは次のカンダウレスの主張について考えてみたいと思う。

これは冗談やくだらない茶番のために造られたものではなくて、世界の運命がそれにかかっているかもしれないのだ。余は遙か遠い昔が目に見てくるような気がする。余には若い神々と年老いた神々の戦いが見える。ゼウスは何度も蹴落とされながらも、恐るべき鎌を手父親の玉座によじ登り、その巨人は背後から

9) ヘッベル当時の社会状況との関連については、vgl. Andrea Rudolph, *Der Ring des Gyges als Revolutionssymbol*, in: Schriftenreihe der Friedrich Hebbel-Gesellschaft Wien, Folge 7 (Anm. 1), S. 75-94.

重い鎖を引きずりながら忍びよる。なぜクロノスにはそれが見えないのか？ クロノスは縛られ、切り落とされ、追い落とされる。ゼウスは指輪をはめていたのだろうか？——はめていたのだギューゲスよ、ガイアがみずからそれをさし出したのだ。(V 1782 ff.)

ここにはウラノス、クロノス、ゼウス3代の権力篡奪劇が、混同したかたちで述べられているが、ポイントは太古の権力者がギューゲスの指輪をもっていたというヘッベルの設定である。当然この世界の運命がかかった指輪は、ヴァーグナーの『ニーベルンゲンの指環』をはじめとする当時はやった権力と暴力に関係しているということになる¹⁰⁾。指輪は他者の欲望が作動するとき、その効力を発揮する。まず盗賊がギューゲスに対する欲望を駆りたてられたとき、指輪は威力を示した。さらにカンダウレス、ギューゲスがそれぞれロドーベに対する（互いの）欲望を充足させようとするとき、指輪は効力を発揮させた。そしてギューゲスがこの指輪を持ちこんだことによって、象徴的に権力交代が生起する。ギューゲスが墳墓で発見した指輪は、権力交代劇をひき起こすきっかけとなったのだ。指輪はふさわしい権力者をめぐって彷徨しているのである。したがってこの指輪は権力の象徴というよりも、正当な権力者をめぐる象徴ということになるだろう。実はギューゲスはみずからが見つけた指輪に見いだされたのである。

カンダウレスがギューゲスとの決闘に倒れた後、ロドーベは言う。

ロドーベ 私には死者の指輪を証しにください。

ギューゲス それは王様がまだ指にはめておいでです。

ロドーベ それではもうそれにふさわしい場所にあるということですね。(V 1969 ff.)

墳墓で見つかった指輪は死者にこそふさわしい。権力を失った者を葬りさる不吉な指輪は、権力者を選別するという役目を終えた今、ふたたびその眠りにつくことによって、平穏な世がおとずれることになるであろう。これは後のヴァーグナーの「ニー

10) Vgl. dazu Wolfgang Wittkowski, *Die Bestialität in Handschuhen. „Gyges und sein Ring“*, in: „*Alles Leben ist Raub*“. *Aspekte der Gewalt bei Friedrich Hebbel*, hrsg. von Günther Höntzschel, München 1992, S. 195-218.

ベルングの指環」がライン川に還って、平穏な世がおとずれるのを先取りしているかのようである。

こうしてカンダウレスはあやまちをすべて贖い、この世を去っていくが、そもそもギューゲスのカンダウレスに対する殺意は、他者すなわちカンダウレスがみずからの矜持を守ろうという欲望に支えられている。逆に言えば、カンダウレスの矜持はギューゲスの欲望に支えられているのだ。しかもその殺意も、実はロドーペ＝他者の欲望、すなわち矜持を守ろうとするロドーペの意志を出所としている。

悲劇はこれで終わりではない。約束どおり（よりによって処女神）ヘスティアの神殿でギューゲスと婚姻の誓いを立てたロドーペは、

私の罪は贖われました。私を見たのは、それにふさわしい方だけなのですから。
ですが、今はお別れする時です、(みずからを突き刺す) こうしてあなたから！ (V
1973 ff.)

と言って、みずからの命を絶つ。当然これはヘロドトス、プラトンにはない設定であり、またやや理屈っぽい終わり方でもある。すなわち夫以外に見られてはならないという祖国の掟に従って、まずこの一件を企てた夫を滅ぼし、自分を見た人間と結婚したうえで、やはり結婚前に見られたことの責任をとって、みずから命を絶つという凶式である。この自死をめぐるは古来様々な説明がなされてきたが、むしろここには近代的といえる社会的理念と、近代的自我といったものが見られる。そしてその底流にはさらに近代的ディスクールがながれている。

つまり彼女の意志——掟を守り、自尊心を保つこと——は祖国、すなわちこれもまた他者の意志である。一見強い自負心に基づいていると思われる彼女の行動原理を統御しているのは祖国の意志、いや祖国の権力構造である。権力は見えないところで動く。それは具体性も、具象性もない。しかし近代的個人はこの姿なき権力に、無意識のうちにみずからすすんで服従する。

しかもこのロドーペの祖国の原理はきわめて保守的なものである。これはカンダウレスの啓蒙精神と対峙せざるをえない。カンダウレスはおそらく軽率であるが、彼がロドーペのペールを剥ぐことは、旧弊との対決でもあるのだ。彼は儀礼的行為に価値を認めない、いやむしろそれを打破することを、みずからの趣意とする。これは文化

の対立でもあるが¹¹⁾、さらにイデオロギー対立でもある。ロドーペは祖国の価値観に殉じ、カンダウレスはこの対立に敗北して斃れる。これは価値観対立の悲劇なのだ¹²⁾。

一方これは人間の世の中とは矛盾にみちたもの、一義的な解釈など不可能であること、論理性とは矛盾の同義語であること、決して合意形成などできないということの寓意劇でもある。そしてそれはふたたび近代＝民主主義に関係している。カンダウレスは実質的な価値をもって、権威主義を克服しようとする。つまりそれは実力主義でもある。するとヘラクレスの末裔という世襲に根拠づけられたカンダウレスの地位は、つき崩されることになる。逆に近代的国民＝大衆は権威を求め、あるいはそれに服従することを欲するものである。つまりそれは保守的価値観に支えられた民主主義である。そしてそれは諸矛盾のバランスの上に成り立っている。その合意形成はとてつもなく困難である。

一方で（あるいはそのカテゴリー内で）美の問題が浮上する。カンダウレスの美意識、すなわちロドーペの美の評価は他者（ギューゲス）の判定を俟たなければならない。絶対美など存在しないのだ。美しい花というものはない、花の美しさがあるだけだ。人間の判断とは他者の欲望に支えられている。こうした多元主義もしくは相対主義は近代特有の問題、すなわち神が死んで以降、もしくは絶対的な価値観が崩壊して以降の問題であろう。

これは18世紀以前には存在しえなかった作品である。フランス革命後の19世紀後半を俟って初めて成立した、古代の衣装を帯びた、すなわち神話的権威によって一般化が試みられた近代悲劇なのだ。

11) 文化対立の面から、現代の移民問題との関係を論じたものとして、vgl. Andrea Rudolph, *Nur ein Stück Stoff? Was Friedrich Hebbels „Gyges und sein Ring“ (1853) zur Erkennung einer krisenhaften Migrationsgegenwart beizutragen vermag*, in: *Grenzüberquerungen und Migrationsbewegungen. Fremdheits- und Integrationserfahrungen in der österreichischen, deutschen, schweizerischen und polnischen Literatur und Lebenswelt*, hrsg. von Gabriela Jelitto-Piechulik, Małgorzata Jokiel und Monika Wójcik-Bednarz, Wien 2015, S. 97-114.

12) ミヒェルゼンの論文はこの対立解消の不可能性をロドーペ中心に論じた画期的なものである。Vgl. Peter Michelsen, *Rhodopes Schleier. Betrachtungen zu Friedrich Hebbels „Gyges und sein Ring“*, in: *Festschrift für Klaus Ziegler*, hrsg. von Eckehard Catholy und Winfried Hellmann, Tübingen 1968, S. 233-268.

Die moderne Tragödie im mythischen Gewand

Hebbels *Gyges und sein Ring* als Begier des anderen

Shigeo SAITO

Kandaules, der lydische König in Friedrich Hebbels Stück *Gyges und sein Ring* (1856), ist ein sogenannter aufgeklärter Monarch, der mit der eigenen Kompetenz und durch das Vertrauen des Volkes auf seine Persönlichkeit regieren will, während das Volk konservativ ist und Autorität von ihm verlangt. Wenn jemand eine solche Autorität geschickt ausübt, wird das Volk sich freiwillig seiner Herrschaft unterwerfen. Was den Willen zur Macht von Kandaules unterstützt, ist die Begier des Volkes, nämlich des anderen. Hier ergibt sich der Keim der Demokratie. Das Volk aufzuklären, es die Ungerechtigkeit und den Unsinn des Klassensystems erkennen zu lassen, bedeutet für den Machthaber den Verlust seiner Macht. Es ist ein logischer Widerspruch, dass der Machthaber Reformen durchführt, denn sie würden auf die Überprüfung seiner Macht drängen. Die Dialektik der Moderne geht ihren Schritt nur vor.

In der kapitalistischen Gesellschaft entscheidet das Einverständnis des anderen, ob man glücklich ist oder nicht. Das hängt davon ab, ob es die Begier des anderen anregen kann. Dabei hat das Gefühl des Betroffenen mit dem *objektiven* Urteil nichts zu tun, das die Begier des anderen entscheidet. Die Begier von Kandaules nach seiner Gemahlin Rhodope heißt die von Gyges. Die Erfüllung der Begier von Kandaules, nämlich sein „Triumph“, bedeutet die Katastrophe der Liebe.

Der Ring tritt in Kraft, wenn die Begier des anderen in Gang kommt. Er wandert um den würdigen Machthaber. Damit der finstere Ring, der denjenigen begräbt, der die Macht verlor, wieder einschläft, nachdem er seine Rolle gespielt hat, den neuen Machthaber auszuwählen, wird die Welt zur Ruhe kommen.

Andererseits ist der Wille Rhodopes – das Gebot zu beachten und die Selbstachtung zu bewahren – der des Vaterlands, nämlich wiederum des anderen, bzw. die Machtstruktur des

Vaterlands. Die Macht funktioniert gestaltlos, der unbewusst das moderne Individuum selbständig unterliegt. Das ist sowohl der Antagonismus der Kulturen als auch der der Ideologien. Rhodope stirbt für die Wertvorstellung des Vaterlands, und Kandaules verliert bei diesem Antagonismus.

Es ist auch eine Allegorie dafür, dass die Menschenwelt widerspruchsvoll ist, dass eine eindeutige Interpretation unmöglich ist, dass die Logizität nur ein Synonym dieses Widerspruchs ist und dass man nie einen Konsens erzielt. Es geht um den Pluralismus oder Relativismus, nachdem Gott tot ist oder die absolute Wertvorstellung verloren gegangen ist. Das Werk hat seine Herkunft in der Zeit der bürgerlichen Revolution und des Kolonialismus. Diese Tragödie trägt zwar ein archaisches Gewand, doch den Diskurs der Moderne als Basis ihres Denkens.